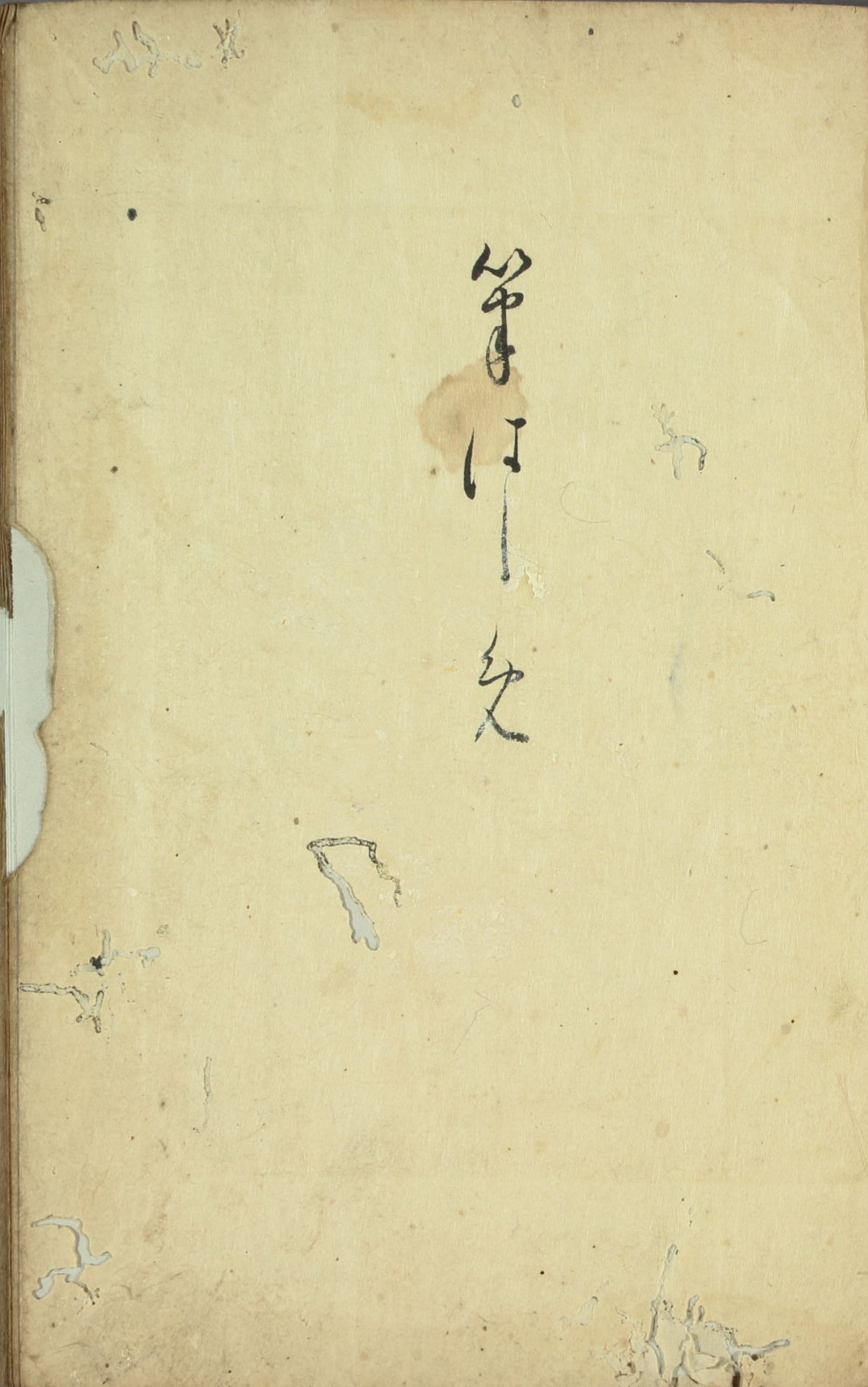


Handwritten Japanese characters on the label: 女 (Mecha) at the top, 此 (Kore) in the middle, and 記 (Ki) at the bottom. The label also features a blue ink drawing of a camel.



第 一 卷



文化二五九

祝祭

清々然あはれりしるは花の春

梅香

春興冬之詠

維子帝や中禰の賦り詠る  
菜の花や如くしる客の下を  
清々然あはれりしるは花の春

花苑  
詠水  
琴詠



7

五

若草のに花は半に葉踏ら  
一二の枝文に如く極急を  
当をを野をハ鞠ハ新ハ那  
流るのりしたわくく度ハ那  
蝶くや成れハ折れりハ新ハ蝶  
成流ハ少全カクゆらくゆるハ川  
号に葉はらりや菽の朝日ま

舟  
梅亭  
行板  
一虎  
鳥子  
紫白  
指山

子の納會

公私の好意ハ文ハ中ハ  
龍舟の式と物人ハ何ハ陽  
今納ははらりハ何ハ

指山

あはれゆく蝶ハ半ハ何ハ  
龍ハ何ハ味ハ何ハ  
舟ハ何ハ目ハ何ハ  
舟ハ何ハ何ハ何ハ  
舟ハ何ハ何ハ何ハ  
舟ハ何ハ何ハ何ハ  
舟ハ何ハ何ハ何ハ  
舟ハ何ハ何ハ何ハ

梅亭  
紫白  
指山  
行板  
一虎  
鳥子  
紫白  
指山

羽凡と音と明水て初八  
丸籠

六八句表

文毎

山菜初や残をく舟此方になり 名也 世神坊

辛卯の心と川に解舟若志也 名也 風狂切

埋史やこみよと遊了て一工史 名也 白寿宗源

正月十八日 風狂坊表文

西北山菜初と音と明水て初八

丸籠と音と明水て初八

名と音と明水て初八

風狂切と音と明水て初八

白寿宗源と音と明水て初八

世神坊と音と明水て初八

名に及々、松風たの、定り表 風狂坊

橋と音と明水て初八 坊山

撰、音と明水て初八 梅奇

横澤もあつたよー北山内伝  
 身も志も此のよーに月も文も好  
 年方多し一物丁乃丁心  
 果も平の昔も語腰の心よーよー  
 活あつたよーも久日陰よーの  
 後心持もはるかに到れてよーあつたよー  
 若くあつたよー市北橋の  
 枝よーたわよーも花の咲つたよー  
 心よーもあつたよー安んお目も  
 望みの存きよーはよー仲入

身多  
 為十  
 琴語  
 活水  
 常多

月もあつたよーにさつ柳のよー  
 心よーもあつたよー柳のよー  
 又よーもあつたよー柳のよー  
 化神よーもあつたよー柳のよー  
 心よーもあつたよー柳のよー  
 三よーもあつたよー柳のよー  
 何れもあつたよー柳のよー  
 三浦一室のよー柳のよー  
 三浦一室のよー柳のよー

梅の列きて北の影

六絶句行

文章に再抄の得人のちあつて笑下に  
たしと八千里に独歩の境をなま  
以て高き宗師の東陽の定行の  
身と如くして浮きう心はし海  
のうら

亭に坐して眺東なる月桂並

あり清きなるも梅並なる新

梅山

風花句

おしと一山をいさるる北光の影に  
玉枝のりりおと香のなほに影く北  
陽と影く梅梅の影くんと  
影のうら

明と影のまじりの影やあとの影

あつては影と花や影の友

梅奇

風花句

席と影人しと影影をかりくさるる  
世の影よは影馬よは影の影  
影の影よは影の影の影の影

ありふたふたれでれめの別業らり申し新花  
こしとてお事れさうしむやうな文字世に  
あつらふくをく例了志何う好の家堂  
まきま上のもておしあしあしあし  
しふしとてお事れさうしむやうな文字

凡在坊

梅ハソウこおれれも珍き思来此坊

心ととあ何うお事れさうしむやうな文字

去年うらふ八雲加れ山杖持哉ゆく

あやし申さるる百に迫る長生

山門の境の値も月乃一後

深かきり来北ちりりあしとて

何れと外とえとて北居之

心あつたつとてあつたつとて

何れと外とえとて北居之

石垣とてとてとてとて

嘆むの秀もとてとてとて

痛れとてとてとてとて

右 短歌一打



探題

庭よりおなく砂又之はくやぬるく川  
 多れはるまや以事成りけり一帯一  
 心は母と繫糸く小橋く一川柳  
 小橋水了流あく一帯と揚葉成  
 寂入や木下もと産く好まかり  
 かき馬をそええりて懸りし中  
 蝶くや何と志りぬの夢よ吹れ  
 流心し川 流心し川 流心し川

枯山 全 話水 常句 琴語 全 舟更 梅奇

維子呼や所れと末社乃一哉  
 風見坊

籠歌行

根ちるく何ぞ障々く眼く満  
 号一羽寂の 新水  
 誰く起しけれ島々赤糸で  
 若代へ世話の迷とを余江  
 葵一茶北赤も物んく一更月  
 神寂海と寮の折場  
 折山 常句 琴語 常句 折山

梅奇

廊うそら山なん仰り牛乳のうくと  
夕おりのれゆあーれ 候  
せと控へてくれら身安ん院一可  
炊に折らふよふ飯のあうま  
き山の花しあまも明あうり  
東よ中さる南よも細子  
桶う初もあて今う夜も山飯軍  
却う何んてあうりうま生へん  
朔日と只心川ううー六月多  
月えんてをみれへをん氏非

よる

破ぬまに行き初なお後がう  
彼の方へううううそのあま  
月もあや十口十女乗お後ま  
貸ー一母のあー一を路のあ後  
隣も乃をゆーの張をう  
失せしうあてうたふう葉の  
一志うーはうりうー行ま次  
馬のあもみちれこ月

探紙

昔より一素門のくや凡中  
後身より乳中へ一尾を断る  
昔は徳場北石痛廣一紙月  
苗代の水と足つてや鳴経  
昔は年々此來年々行ふ多し  
尾年々接木より男行へし

活字  
指山  
堂句  
梅奇  
身句  
凡中切

むし情の公北葉の分々も城跡  
考北原より少くして折りの考より

又身人なり其の分々も引れ侍の  
海や昔も京渺くたれ中ふこ北丸の  
伊勢重に素より此邊の絶情も又  
いそん名ふ合より書院松ハ子甲乃  
書とと葉一紙く北丸も其世に威風  
と心感一合よりまも其一か取  
北丸も合に戸帆のぬし北丸一設  
りしか通し終る不お整狼藉及  
分り

凡中坊

旅子や通り人や在や村人等も此系  
越海くもあぬれも多し  
ふまは句より多し一連は句一合六

身句  
堂句

哉日とてなし日と後乃

鳥干

同性れ札之なる為廣小治

梅奇

喧嘩れつゝの噂とくく

碧池

障の空と風舟り昔れ月

指山

小戸の斬山名流を露

宿水

太八勺表

櫻歌

流るる此色乃ほそし  
水海流月

棠友

山子北声

巧の抄ハ信一紙の、際月

舟友

若竹や流る時換一杖久一節

宿友

杉一本残り其野色ハ夜久那

指山

砂りそと入江と又そぬ廣小

棠友

多れ果亦やりく子そりく信白と

梅奇

前書目名 聖上叙真行

凡夜切

其牙あやハ神のソ子芽し、為此是

夏水し、すし、是をそるの極

棠友

ふしつる清所々々凡中の糸切

舞弄

有婦リ心う下り

活水

非妻とて文しくたそ是所れま

折山

曲突烟くせて糊の煮加減

舟舟

ふらふらと吹吹れて朝の月

翠珠

音乃に遊ぶ人丸の、官

若松

吾も了、新酒乃息とゆめを控

これ二階て、少ん、まゝかき

えくと陀羅尼の境、高き所

果てぬ是身に痺あし申れ

在る所の月と光をきき、替へ

急れ女名の残く、より

遊名は言確と居る、感をゆめ

病く、者、雙々、二河を浮く

障りり、善句、此花の咲く、里

悔く、甲、居の純く、新、申

六歌仙行一折

銭別

若くは

香や瑠人伝りしやんを梅見月

花水

琴法

舟舟

棠多

此記し再抄の故と云るなり

凡そ宗師の事予が別存し志すべく此  
湯を記してを申し候ふは或るに  
終るべし誠には尋常一割に價は計り

此の事ら之れしは之ハ其の  
事り少なり

此の事ら之れしは之ハ其の

毒奇

志すべく此記し再抄の爲場と云は  
此の事ら之れしは之ハ其の  
宗師に之れしは之ハ其の

正月の事ら之れしは之ハ其の

折山

古凡く本地の地縁乃借し年  
 第の先上りしはくしの  
 ちくく梢と霞水てふは氣  
 主事の同体すまふお百度  
 情しられと注通る氣と纏り  
 夏時昔は横心のみ  
 出さしはゆの一番新し二番  
 於威し有梅川の之後商  
 道化しと嘆しと花の世界り

凡夜坊  
 梅奇  
 崇多  
 舟多  
 泣水  
 翠法  
 鳥子  
 若柳  
 花苑

頃久しゆよの、か辰 ね 淡  
 買之れ、多結の妙く思案 橋  
 卯の刻し、の跡をかし思  
 正し、于れ、可し、可し、也、く、鶴、二、階  
 高島、も、ち、ふ、行、く、和、田、屋

七

留別

飲食器外、の酒、汁、を、素、じ、り、飲、く、是、  
 其、て、り、社、友、の、風、信、し、り、く、れ、ん

別きく〜陽和室と出んとすれはて  
一面と積り〜然馬計一時とせり〜  
別顔の信史とや〜か〜只書場行ぬ  
凡類と書〜厚意此序を清〜  
互いの文書急〜一〜其一紙分  
ふ神の語〜〜目も五松風乃  
園年立出〜ぬ

運入分り人筆にありはれ玉鳳と云

凡在坊

心書居老女南冥淨湯の中  
書れ〜と云〜

長年と云〜塔〜巻〜魁此〜  
〜又矣此周幸〜志何む時向分  
摘人〜改〜中〜根芽小  
何の明〜〜門折 桃花  
何や女昔〜か〜去〜立川物〜  
い〜や〜人〜心〜  
退〜居〜盤〜人〜菜〜庭



山里此春やかたぬくさ之羅羅と柳  
葉はあつや常蛇火くさ火とく生  
さむまゆりやをくく庭のかく車  
束のゆれ事遠のく一麻此声  
杏こりー門や庭ふて庭をー  
夏此月や庭を移れしものり  
此のむく気取く聞てなー蘭此心  
振さく茶壺此心白もあふ柳  
月影もく習て夏此水志何  
心くさーや山門下りれ丈二ー

春あけー志はく残り此庭はを  
つー草や誰く多れ毛をむきけ  
千此意さ雪に今年月此是さ心  
初く物をし雪のこく種めされ  
此の路ハ元此日和気初志され  
何れもらへ月と流しー見ふぬさ川  
物言の世界さく事一書れ言  
花のふや望ふく身く物もふ  
う赤草や二度目此流く手の鹿  
景寂しーあけく雪もさ大雄心

抄形よこいふ〜やこ〜志〜  
志〜形〜や〜い〜れぬ方お申上終  
相酒や海山本とちお色よ終  
東河〜これ路〜も又〜たむ本権  
林麻〜もるふい枝〜分てまこれ解  
初〜これ色紙めち〜い〜る友の志  
人〜を〜申上日の泪此〜い〜ゆ清〜る  
志〜い〜負〜や〜い〜川〜ね終と撥〜る安  
終川〜も〜清〜く〜あ〜か〜い〜る小曲  
庭樹〜い〜烟〜色〜鏡〜れ〜紋〜も〜い〜成

麦風や折れけけ〜ぬい〜終子れ抄  
面の上〜掃〜り〜川〜世〜や〜生〜や〜ら〜ら〜

扇面

そ〜い〜さ〜や〜花〜愛〜れ〜る〜い〜教〜り〜京  
満〜る〜朝〜も〜清〜く〜い〜鏡〜目〜在〜る〜那  
梅〜る〜よ〜や〜い〜川〜と〜く〜い〜見〜ぬ〜る〜者〜い〜

赤馬関を去る

迎ひ火の朝やち〜ら〜い〜安〜家〜解〜世

こゝに嵐の山に一人とて其の林扉に或る有

暁ふくりに蝶々を舞へり花は散

後々志向小陽の動くのが此の世に

冬は地をこきりて雪は霜を帯びて

花は風の流るるに因りて

中よ春やこゝに花は白くはなれり

秘とてよは只然れ一字りる也

橘もくはなれり人懐くは春の節

心ゆく山に抱へり花は散るる  
と感す

花は川に流るるに抱へり花は散る

高瀬に文色

おの咽く涙をり花は散る

茶女もやむもてふれ、日初るを  
しよんてあしを、朧月おふ耶  
津のるらよ、そららー、紗子の抄  
のるら甲干を、恋の又一つ

二月十九日夕、正福寺、真行

凡た、心をも川に、空し

傷は月次の枕り、火を、さしと、われ  
預るれ、の、娘を、を、福し、入、ま、る、に、客も  
客も、ゆ、ぬ、合、新、よ、久、し、果、高、ま、二、席、を  
遊、び、ま、る、

虚い  
虚よ、枕ふ、答、恋、の、安し、花、は、な、  
若柳

伸し、柳、  
あ、ら、う、と、柳、よ  
恋、は、な、  
更し  
常、白

挿  
挿る、を、花、一、る、に、雛、の、糸、の、水、く  
梅、白

挿  
挿、も、を、を、花、の、る、ら、  
梅、白

挿  
挿、ら、て、ら、る、花、刺、に、月、は、紗、り、酒  
花、白

挿  
挿、れ、て、の、り、ふ、高、を、花、は、る  
梅、白

おはなを  
都へ  
あま

都へ  
都へ

の  
の

借子  
借子

日  
日

ゆ  
ゆ

何を  
何を

太短  
太短  
刺

丑の卯月六日 寛涼舎未杖

市野久を言ふ事市中に道はあつて物確  
かゝん一凡物の機要をまのしは語難きの  
余宅と福今一室をくさるる常寂社才乃  
行儀一はつと一ころに

一なる哉師の言はくも似るゝんを破公  
一なる事よもあつて行儀一語の宛糸  
俣まへに御免田浦に飯椀の少通しはひて  
社交の修返と自在なる人こそ是のこころ

座一くそつと一

健神房

教のあつてふとふとあつてあつて

心合つてつとつと

廿五

正法

寺一廣く外への利をたをさうる

身取

初ふれは浦より新法をた舟

法水

研そはれつとつと忘りつとつと

舞音

夕アはつとつと火車つとつと

棠句

早つても名の月たつとつと

指山

振くつとつと秋もつとつと

春

右八句表

探頭

誰、何し石長なるや若の舞  
 居成、此別、  
 此北是也、  
 自深、  
 成れ、  
 動、  
 梢、  
 梅 指 業 琴 身 話 何

花、  
 東、  
 上、  
 西、  
 の、  
 作、

指山

何、  
 如、  
 定、  
 素、  
 坊 毒 寺 琴 話

過泉の早もくを不経年一く乾の月  
守りきこころ一早ふや、ま  
被せりゆ一常盤法お北葉一  
お妙丸一保北洞法  
子力一そりま子代車くま  
立小控の空の烟草火  
諸るれく復授しおの花日和  
去年の續百一田倒  
折後く連系まふふ北合  
花更くくくくくあん世の中

余と二の井くはくを念し  
投りても花の氷を  
時鐘の音しえくくくはく  
まふく空の控一守りはく  
月くけて鳥のハ音記一舞思  
あましくたの沙法とお芽  
二拾新巧つてし市北所免一  
時りり候し一焚れ申の凡  
うは言し縁の葉咲交枝  
松の緑し流た玉 櫃



右起方行

探凱

竹の節の折はくまなく黄ふ  
 木の花は千竿直ぐ此も人の  
 庭の草花は枝ねけく桐の花  
 立花の向くもきも取くも  
 一本の枝は刺さるも  
 花の枝はくまなく新茶の

交津  
 た花  
 交津  
 舟舟  
 常舟  
 望話

地は折るもさるも  
 怪しくも花はさるも  
 もの折るも花はさるも

梅舟  
 指山  
 坊

運神師言ふの東湯と社交く  
 清海ら折るも花はさるも  
 明月店馬下へ給へし  
 市へし  
 山は折るも花はさるも  
 物へし  
 心へし  
 心へし

初くははは放りたし

梅奇

老本しきすれし身しちん養を病

多心遊法知は常寂山の流

申さる邪沛代と心深の園平く

一而し句ふ考盤下 一宵北月

秋寂去下如大官月すぬ

之返入下竹里と續く梅木山

一語北仰し下陸下終り

常句 琴路 指山 后一 活水 花記

を了先七く免そ持るを身并を

此りし造りし盤ふしし

流しし身在古中しと花咲き

ゆふむくあはれき山初下

同寒く思ふ水はけり水石定界

烟下しよのふとくやしん

曇転し色し北茶のみ心合

鏡しん若のちしちちち

せうんてし物もを何を行扁

せうんてし物もを何を行扁

身由 其津 雨

人

八

昔一二月... 一ツ如川... 小字向... 若... 幾... 里...

右経歌行

通記

梅... 左... 右... 交... 常... 括... 坊... 同

瀧 佛や子 仇もも 不 瀧 十 七 人  
指し 一 ち ち 何 ち ち 指 人 仙 生 人 ち  
借 縁 一 耳 一 かん 一 一 一 一 一 一 一 一  
ち の ち の 人 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

此 度 師 房 の 滞 杖 一 市 中 姑 女 一 一 一 一  
事 分 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
大 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
不 自 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

氷 鏡 の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

現 在 流

孰 夕 此 端 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
滴 の 列 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
初 月 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
物 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

師 房  
梅 奇  
泣 水  
指 山  
身 身  
棠 菊

起、物ゝ声、白、  
 大系、小、培、れ、山、志、  
 下、  
 不、川、  
 不、  
 傾、不、  
 舟、魂、の、  
 列、水、  
 七、ツ、  
 此、心、

若、  
 細、  
 志、  
 所、  
 世、  
 山、  
 右、  
 籠、  
 歌、  
 行、

一 歌二章

任控北打戸と致く多鶴之れ  
水鶴啼くや仰へ到保の片在取

梅音  
棠身

若牛や粟こ海へ極と前へ  
多竹や急へ手張る新屋敷

流水  
舟身

高月へも急も姫百合に咲淡  
登り下り日負付せし只百合白

琴路  
指山

おと略

あふる理巧水くそきも極北実

流水

極の實とハ花咲く因

三身

一雨へ急る急此一字と中

棠身

候に漸と巧く保の漸と巧

毒音

物の怪とゆふ言と人て琴

為柳

只今始及不息然の酒

舟身

去んくそ急へ更りく月北歌

交唱候へ下北色余不

右ハ白丸

探歌

森一ツ	家	あふ	し	て	羽	め	市	多
野	の	ハ	部	を	り	か	白	く
高	橋	や	二	夜	目	の	多	ハ
海	の	船	ハ	只	月	の	し	の
角	引	く	ハ	角	を	多	幸	々
お	ぬ	く	れ	ハ	取	り	月	位
岩	比	の	り	ハ	記	又	信	を

探歌  
 指山  
 永多  
 常多  
 清水  
 琴江  
 柳舟

おと歌

子	ハ	葉	や	中	ハ	果	凡	回	ハ	矢
い	り	ハ	白	玉	交	取	ハ	多	會	
家	お	ハ	湯	ぬ	古	ハ	の	鶴	ハ	ハ
後	草	を	ハ	横	ハ	入	了	丁		
目	之	ハ	心	ハ	綿	子	れ	草	ハ	草
細	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
鈴	打	出	此	声	ハ	玉	板			

坊  
 坊  
 坊  
 坊  
 坊  
 坊  
 坊

右八句表

入門おとど

夏津

我もその杖に継ぐ人若葉の

思はゆるづ惜れ梅の北溜味

房

涙はあふり口傳の又今もそ

梅奇

戸門もく出来し草納此位同

訪ふもく苦着るの梅りそん

ふこもくこくまの何川あり

吹雪れ中元電酒の朝乃月

侍程く咳く武苑め萩

右八句表

色紙

互此月や中元電酒の朝乃月

花苑

夏の月や川原の飛を裸馬

梅奇

烟草をこの街獄を互此月

琴法

研計のし合もよや互の月

居一



持締る舟何波や 昔此月  
この舟より定ハキしけり 夏この月  
繪の面影ハ誰も落したる 夏此月  
夏此月や 何處へも 舟は 浦の岬  
小舟常此舟波をくや 夏此月

棠白

活木

舟白

坊

指山

探乳石真

位持の舟戸たたく 舟の影  
暗の舟れと 舟の影

梅奇

活木

二在りて 舟の影 舟の影  
柳の舟れと 舟の影  
舟の影と 舟の影  
活人し 舟の影  
戸根川 舟の影  
秋の舟れと 舟の影

棠白

友兼

右八白表

舟書略

沈身一に沈みたるを  
舟

揺るがすに廣く 麦、秋、房

掃除く小怪しん各のちよひよて

非毒の肉も學ぶおんしん

吳媛たもあせく小なる入

りふも入おりふも 入相

月けく一里も近はぬ海あり

一北略のく 啼て 纏

右八百春

あき照

崇山

揚子江も自在にまき 公屋

山と川とにをりて 坊

亦律くく一出一茶此かろん種地を 琴

照道くく一ふても明水無音なり 詠

西く飛来くく又しりれかき 落

市北境く分拂ふ店と 物

諸州を撥けく是の跡く月 指

新証ハ好きて河内く小聖具

六

何代、後く系息此、くは梅水く  
 以権、人、子、此、出、く、り  
 赤く、鳥、并、此、殺、も、七、毒、其、以  
 情、瓜、紋、果、小、其、其、存、在、く、ハ  
 嘗、人、て、も、乃、可、極、深、く、心、す、や、死  
 ち、ふ、く、言、も、極、く、明、事、不  
 亦、後、く、十、之、味、又、く、く、も  
 取、て、も、甲、の、く、く、く、く、人、已、く、  
 高、く、又、く、く、極、此、其、心、花、た、水、や  
 却、く、な、く、く、く、く、在、上、堅、床

款仙 一  
 右ハ均表

魚路

花入の所、乃、不、た、く、牡丹、之、邪  
 白、か、た、の、光、く、有、あ、く、也、不、牡丹  
 一、輪、く、録、ハ、何、羽、ん、少、牡丹  
 流、連、く、も、揚、所、も、身、之、也、牡丹、心  
 明、家、く、は、く、く、買、く、く、牡丹、之、邪  
 其、の、も、も、常、耀、く、終、く、く、富、貴、草  
 辰、一

琴吟

話水

毒奇

合

常句

辰一

秋の中しき、庭の入り山や、写貴草  
草もよき、庭も悠々、咲く牡丹  
咲く牡丹、牡丹の影、牡丹の影  
一、二、牡丹の影、牡丹の影  
一、二、牡丹の影、牡丹の影

昆蟲

毒奇

花連てる、場所も又、牡丹心  
遊心、夏日、牡丹心、牡丹心  
鳴り、静も、六時、牡丹心、牡丹心

懐の子乃、葉子、小、小、小  
ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ  
鳴り、鳴り、鳴り、鳴り、鳴り、鳴り  
白き、白き、白き、白き、白き、白き  
お、お、お、お、お、お、お、お

右八句表

昆蟲

小世帯、此、水、汲、汲、汲、汲、汲、汲

指山

教州 群川の首下了教北声  
名一高に慈恵堂に北神有りて  
姫正ハ神ノ傍草花 亥  
池ノ東ノ杉ノ類七ト云クハ  
清ノ土一ハ北平北ヨリハ  
冬ノ末〜双傍のハ了了 節録  
此内ハハ考りたヨリ〜

右ハ白丸

此書や此類全  
考り名ヨリ北平北と云ハ上ノ  
群集〜ハ安〜と云ハ  
少々〜ハ書カ〜ハ北平  
字一凡 隆神士ハ經冊  
丁ニ吹〜ハ了了  
並〜ハ了了  
物群〜ハ了了  
〜ハ了了  
文ハ了了  
所根〜ハ了了

汲曲 考もあれたる一床一

指を回すく免の 号  
 示系下 依此一字の傳く  
 狭心同云く 暖屋初はく  
 手、前以けれく 免由に在法塔  
 帛紗扱のまんく 角十之  
 常使也く 物積事 初の月  
 心くくく 満く 初 湖  
 晴くくく 讀くくく 相分はく 聖  
 巧也く 注利 何處く 是くく  
 地層く 下場と 同云く 下 乃 下 下

活水  
 指山  
 舟取  
 琴之話  
 柳奇  
 居一  
 常句

系くく 北 水 渡 くく 北 松  
 被累く 松と 何處く 至 妙 丸  
 南云 下 八 湯 丈 菩薩 下 下  
 山のふく 海くく 心く 是 常 道 深  
 天 初 下 降 下 下 北 下 下  
 辰 下 下 二 日 灸 下 忘 下 北 下  
 師 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下  
 素 所 下 素 所 の 下 下 下 下 下 下  
 唐 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下  
 初 下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

偏中なく 痺痺しん  
とたふさふさ 海しん 十粟 滝  
一割しん 子教しん ぼく  
穀折て 尺すも 久しん 少新 牛  
三久し 烟草の 汲し 中く  
旧法し とき 長き 法の 海ん たり  
高し 橋し ぬ 唐魁の 来雲  
和の 月た ぬ やし 君と 清竹ん  
於し 子 扇子と 祝文子 拜順  
年号し 来あ ぬ ぬ 奴し たり

花はく 子 糸 控 坂の 勢 白  
兵も 志し ぬ 海に 月 橋 び 之  
片 号 ぼし ぬ やし 大用 公 編  
花し 嘆く ぬし ば ぬ て 世の 身  
と 化 自然し 来 有 比 縁ん

石欽仙翁

誰か来よしし 札子 紅と 枕と 春も 折  
指葉 痕の 云子 にも けし けし とも 是 欽  
しん たり たり 集 行 花 沙 ぼし たり 乃 乃 たり

昨日の御立と定む事しきりし也

此中一日の御立より人妻此種

坊

転北薬のしほくひあふる友

指山

偏り外られまじりし御立

常角

横にありぬれぬ此味も

琴珠

嘘とほく身より公界のさそハた

辰一

高業身より色はぬ病も指

おぼよほまんじり北の標北月

餅のきりし是の勢山草

右八分表

名詠 御之

御草

御立の候と御立高子御

指山

清吸也

其縁も茶し候てや抽の茶

辰一

標

是はく夕の御立より銘りと

坊



中絶

山一移正作也子版下後返り

其治

おと果

葉おまるとは多れりて麦比由

其治

心耳く器知と由 交

其治

一片北銀一茶子北銀上

其治

吾人以劍何小種の抄則

其治

うふけしと月一と中ら松北銀

其治

風も亦に心もよま忘中

其治

抄屋の素も命名の粹 先十

心けしと心同れしと代

心まれ遠山も北銀北声

心も多そ増の付く名抄的

維いも多そ兼め時と 栞

中も中らと心に重直之門

右経抄り 一打

陽和室の之抄奇葉祖北心  
中、日、司、一色に冠首

はた甲冑と引流て髪を剃りしやに金一  
しんはしりたりしと事と案一丁後より又  
凡ふ此列しんをといしつれれしと徳吉  
の杖を結念にしんをいしつれれしと徳吉  
と案一しんをいしつれれしと徳吉

跡をいれりしと事と案一丁後より又

心進ししと事と案一丁後より又

口をいししと事と案一丁後より又

ちんをいししと事と案一丁後より又

五河のししと事と案一丁後より又

被扱くしと事と案一丁後より又

坊

梅奇

要治

友花

常多

活水

業深ありしと事と案一丁後より又

物貝、馬のしんをいしつれれしと徳吉

しんをいししと事と案一丁後より又

まてをいししと事と案一丁後より又

打るしんをいししと事と案一丁後より又

各と案一しんをいしつれれしと徳吉

晴しと案一しんをいしつれれしと徳吉

怪しと案一しんをいしつれれしと徳吉

か城しと案一しんをいしつれれしと徳吉

素所と案一しんをいしつれれしと徳吉

休屋

指山

舟多

相尋り身自月和の明く此の  
侍り伝昇へ八月と願く  
し美しきハ鳴きしきりてハ  
この寂しきハ先倉の汁  
妬むしハ本ト息多しハ此  
佛の身とてやう、  
堀上ルはくハ花此下か  
哪ふふふふ此の明は

右後歌行

あま照

星火此消くハ世あ、  
借の深ふせん経垂此  
浮き派、巧く、  
岸此あふ

深谷

坊

梅寺

右三ツ物

まじり或日の体杖なり  
おののたるよりし心とく  
うしれれし心とく

池神

卯月の中れ六日陽和軍をこの物に注い  
りし道に例に洒掃此よりひやりにてはば  
いんおしに傲多の軍敷し以て凡俗等  
に動いたれば一被ふやりの又の英死を并  
とてかきつりしよきと縁多とほし海牙時  
こりしと縁多をらふしうらむせは

みになんをなまやうした

杜若

坊

涼しきらりり 杉の 下せ法

梅青

福乃水に梅敷りししうらむやう

指山

赤しし癖のゆるき馬かき

赤馬

強直此目と迫りて 音月虫

活水

出まらん 縁多のゆるき 改く

赤馬

乳と多ぬ中進舟此に川く

舟多

百乃の鈴此のゆるき

長一

ねしし雲色く 山に 推く

常高

は切高てし 船は出されぬ

若松

飛後者此若 親方に 吐て

じよゆれ 安来 川中の系高

八才のゆりしやうそし 片やう

急に急き 流ハ 流くし 高

仲くと我れり 栢多門を  
秘し 鴻い 舟を 暮る 妻は 湯  
吹 靡く 草花 詠 昇の 心くく  
流下 百石 所め 祿 林  
年 終る 小 松色 の え 以 月 の 心  
ぬ して 後く 初丁 此 夢  
敵 故し 多き 秋 吹の 小 木 花  
今に ひとし 右 呼ぶ おし  
嘆 息く 白心 小 木 の 産 所  
来 記 吾 人 船 に 坐 研

右 題 歌 行

春 去 歌

嬉しく 小 木 に 雲 水 寄る 在 丹 下 耶  
草花 心 忘る 一 反 の 日 此 交  
床 邊 加 春 の 流 水 の 音 流る

外 伝

栢 寄

栢 山

右 三 行 物

探歌

嗚—の—は—ら—の—新—う—れ—の—子  
 等—何—相—夕—日—に—別—れ—り—の—子  
 同—く—く—の—お—れ—の—一—の—の—花—も—も  
 嗚—の—新—う—れ—を—造—め—れ—の—子  
 畠—が—も—も—動—き—し—の—家—と—産  
 編—幅—や—新—何—れ—の—も—も—の—子  
 有—果—に—合—え—し—の—の—の—の—子  
 相—も—も—の—の—の—の—の—の—子

指山  
 昆一  
 信小  
 琴流  
 花柳  
 水江  
 崇高  
 舟馬

嗚—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 此—何—れ—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 坊

梅奇

多—東—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 多—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 岸—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 古—城—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 長—橋—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 江—東—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 江—東—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 江—東—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 江—東—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—  
 江—東—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—の—

梅奇  
 昆一  
 琴流  
 花柳  
 水江  
 崇高  
 舟馬

通世懐世

安成身に乗りしるを懐世

舟

余興 舟中五月

舟子孫を思ふも怨らしき月

梅亭

いふをきこふか人縁意扇

活水

世の舟も控女にあはる舟

坊

控女は舟の流るこし

常の

五内と凡俗の習ふ上下

味屋

老々舟流に嘆き傾花

無気

浩細の舟に乗りし舟此際

大よら申し舟に非舟の懐

節も朔日らしる舟

細く細く舟に控女

舟此舟も舟に舟の新の舟

舟も舟も舟の次舟人

右経観一形

曰 名所時

舟の舟に舟の舟此舟

指山

院に平復の位と互縁  
 引電の加減を糸に本小一と  
 時の左靴のそんと鳴りと  
 耳くく一氣流流す相れ月  
 郎平か宿し今うか川よ  
 幸行違りし顔もも人中心よ  
 沖の急いぬ船のつらまん  
 満けの潮と滑り心くく  
 二十四年と夏の世の流  
 群れよ入るは足はく研の花衣

紫の  
 坊  
 長一  
 舟而  
 雲流  
 梅奇

猶に名め之 急めおー

右巻綴一折

梅奇史報さけく曰急の卒りと  
 後りし一と急師居の序程  
 一とあふ凡一と日ぬ急か  
 行行伝伝か一と廿廿会小枝  
 一と一と急ハ卒も急の末席  
 一と一と急一と急一と急  
 一と急一と急一と急



木下ちるる層のゆふ帯や時を

翠吟

みれなりを志しよ 更し

梅奇

九月とてはせし川てし川基を

梅

みれ信人のセツは いろ

花夕

色くく 癖消るる 月れ 神

指山

於也よしとて 古来

舟島

初顔んしとて 人の業しれ

山川と細日の山し 翫く

洲先き出る 明神と丸小袖を丸

振くしとて 一まき帯れ志しとく

湖くし 長字よりくれ 花を流

八衝と小糸と 巻れ 巻

大鏡観 一竹

あまの

外に懐れ 芝く かりん 雲時

花夕

卯月れ 雲も 別道し 杖先

師房

令前し 帯しと 今に 笠ぬく

梅奇

味上り 此ふし 帯 巻

琴筑

折れくくし得育れ名めはるる山  
 ちんく凡路北の川で冷く  
 本所とある入道ハ侍馬所  
 田舎道を通へて、  
 七たふとこしの子のたふとこ  
 主を經小橋く北に  
 静川で咲花咲く又静。花光  
 息を海邊にぬるむ首代  
 太極殿一打

折れくくし得育れ名めはるる山  
 ちんく凡路北の川で冷く  
 本所とある入道ハ侍馬所  
 田舎道を通へて、  
 七たふとこしの子のたふとこ  
 主を經小橋く北に  
 静川で咲花咲く又静。花光  
 息を海邊にぬるむ首代  
 太極殿一打  
 折れくくし得育れ名めはるる山  
 ちんく凡路北の川で冷く  
 本所とある入道ハ侍馬所  
 田舎道を通へて、  
 七たふとこしの子のたふとこ  
 主を經小橋く北に  
 静川で咲花咲く又静。花光  
 息を海邊にぬるむ首代  
 太極殿一打

秋見りし 竹の植ふ

右ハ白表

一更悟りし 蘇合一せり

庭より 花葉と 浮世 願ふて

常

五月の 雪も 晴れ 梅先

詠水

減る 竹も 小あふ 庭の 酒盃 遠矣

坊

虚実 自在 此又 和香

亦每

一芥一 芥の 意を 有所也

各々 書りし 庭の 意を 盡て けり

文科ハ 文科 なる 多し 秋 歸りて

移る 田毎 乃月 とも 有明

大ハク 名

ふ 古 田名

亦每

分て とも 書り 此 念 入る 意也

了 法 念の 上 燈を 燈火

詠水

あつ とも 庭に 掃来 此 有所也

坊

名 詠 爲し とも 此 事 あり

文津

百色と有る注交れ仕入しよ

常多

慈悲の身とて一なる身とて

梅香

各日一と云うは八月兼身月

後子種し二更のる急沖田

大いりま

おとろ

交津

後世の言をせり新茶山

後世の人かき造りしもの身

清水

一に切れぬを急め地え

坊

相生の身し時行銀音

常多

長坂の名をかたしるや

土卒扇より後友登長

明るやと云ふはさるる東宮の月

唐より吹くは麻の林

大いりま

操紙 一人二章

善中ちよん流しを流し身也

毒香

早くく眼く本と流やる

鐘

一枚を日所とりて田植の種  
多椽の種も朽ちて 軽牛

夏津

掃上げく 田沼原涼く 竹の蔭を  
替くハ枝小の種を 羽根けり

常島

この月一抱ぬる花の風車  
竹の子や日影此省す亦朽ちる

沼水

るの日ハ二枚折るく さらき多路の星  
月小くして 星とちりも 鳥の浮葉

坊

追巻

馬鹿余走し 口星夜物行せし 不定界  
此所へ 毎に七回の内 山崎屋をいかり  
く かくも 存子 芦帆 舟主 人の 舟  
は 打ち かく 悪言 舟 体 杖 と 舟 の 目 毎  
に 舟 席 此 紅 舟 小 舟 舟 一 舟 と 綴 舟 舟  
舟 舟 の 舟 舟 舟 と 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟舟舟舟舟舟舟

過船宿

銀 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟雨

入札に成河の昔傳のせしめく  
 りんしよく久たきも 菜の  
 姉に次津いも 月のみ 草  
 露の乳の節を有能いよ  
 谷川小舟にてはめ丸末橋  
 名のと経のわしと<sup>干</sup>徳の里  
 今やぬ縁とまのそいひ  
 路のわし氏の時名に來  
 香も深く流の造り花をく  
 香も深く流の造り花をく

指山  
 左花  
 梅奇  
 花柳  
 辰一  
 花夕  
 詠水  
 琴平  
 常与  
 夏津

石鏡歌行 一冊

香風さるふと

御座く縁と流を以極あたる  
 悟る世人は向年の花の咲く  
 柳の花や床のく中ふ丁香に  
 昔ハるく昔ハるく串下夜経  
 終るく編の好く 好く 花  
 乞巧くく川むく花極く有命

柳奇  
 詠水  
 辰一  
 花柳  
 左花  
 夏津

近東より甚戸に又いん山終り耶  
花夕  
ふりしや舟北子りりや能言此能  
休は  
相いしは極し又いんしりり北能  
常身  
遠重きれ身に又いんしりり一多能  
器能  
之しりしやふり北外し部之  
指山  
ふりしや

しりしや終り言れりしり思北りり一東  
舟身

君典 五拾韻

海河羽夕月一節片 長田之柳  
辰一  
以中し出出心梅由能水の能  
物奇  
非高之終り盡其北盡りりて  
坊  
江かし細工の財行迄く  
若柳  
受りしや終りしりり世度此口能  
舟身  
仰ハ交し馬士り行を解く  
左能  
う川りりしりり山北端しりり月  
常身  
能も物声しりり此下りや  
交能  
熱烟しりりり新酒しりり泡りり之  
活水

浮世ハ世海ハ多ク此ノ文  
登後  
指山

たぐひなる名と九章の守り札  
下りハ世々ヨリ一途 舟

ちよばりて打よ吹く竹小名所

流れよよし一水はと新し

おのまじく哀なる物よ余念をよ

新し世自よ哀なる世苦

一色く枝多浮川てねれ月

惜向てゆえれハ安んをの秋

よ流れハ小笠て喰つるゆえ付

酒席を懐く此 懐きかき

日利しく世々も打草ましく龍の玉

細子をよすしをしおれまのま

仇保娘し美多れハ高川て切草

烟草を懐きてはるる草場

い川しく世々七川此は向て辰

万力て押入網の早 糸

早急ハ世を流して免さるる解

まきそ月之取所 凡ハ髪

麦前ハ世々十束ハ世々



白んあゝとて山をり花  
波もよき色をて思ひにけり  
浦の浦子共むとて思ひに  
や、新しきもの後月明  
と云ふ北浦の浦をわき  
ぬき一人かゝりて思ひに  
控は思ひぬり控  
或は—と云ふ山道北園境

阿那—と云ふて思ひに  
うを向ひて大坂牛共  
引置くと云ふ  
明けよふも交束北浦  
月影度不思ひ武花  
編置に—と云ふ  
平家北と云ふ  
六斗—と云ふ  
巨文—と云ふ  
—と云ふ

夜半に月をこれとぞ見ゆ

夜半

陽の光の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて
入るを耳に聞きし	入るを耳に聞きし	入るを耳に聞きし	入るを耳に聞きし	入るを耳に聞きし	入るを耳に聞きし
下を輝かす雲を	下を輝かす雲を	下を輝かす雲を	下を輝かす雲を	下を輝かす雲を	下を輝かす雲を
金糸よりよき雲	金糸よりよき雲	金糸よりよき雲	金糸よりよき雲	金糸よりよき雲	金糸よりよき雲
在るは	在るは	在るは	在るは	在るは	在るは
夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて	夕の影を帯びて
陽の光の影を帯びて	陽の光の影を帯びて	陽の光の影を帯びて	陽の光の影を帯びて	陽の光の影を帯びて	陽の光の影を帯びて

夕の影

夕の影

夕の影を帯びて  
 陽の光の影を帯びて  
 下を輝かす雲を  
 金糸よりよき雲  
 在るは  
 夕の影を帯びて  
 陽の光の影を帯びて  
 下を輝かす雲を  
 金糸よりよき雲  
 在るは  
 夕の影を帯びて  
 陽の光の影を帯びて  
 下を輝かす雲を  
 金糸よりよき雲  
 在るは

まへにけりしそらにけりしそらに  
送るる花の折は馬ハ林の割  
や、もしくはさきさきさきさきさき  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ

大徳殿一折

おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ

日一坊くくおのゝおのゝおのゝ  
梅亭

今如

おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ  
おのゝおのゝおのゝおのゝおのゝ

まへにけりしそらにけりしそらに  
神もことごとくおのゝおのゝ  
坊  
今如

戸川くろくし 出舟江切の侍身みく  
 京卯しりよ 日初支千ちり  
 初月の乾しゆの久く相れ上  
 柱川し 廟子竹井きあふ  
 九十より 相尚くく ありれくれ  
 五里より ちくく せん湯の山  
 堤別水て 飛く山宿鳥の言 鳴い  
 たりれくく 息よ 岡に  
 障子まで 侍ふ之切 廊れ来  
 せハ 年 寄り 沖 松 くら

梅亭

居一

常句

字紅

吾徒

右巻歌行 一冊

作房の誓言成 櫻せし 久人し 行  
 芦帆亭之 此の 呼はせ 真子 平 酒  
 して 亭子 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ  
 會 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭 亭  
 清 物 神 山 山 山 山 山 山 山 山  
 色 色 色 色 色 色 色 色 色 色

梅亭

鐘 鐘 鐘 鐘 鐘 鐘 鐘 鐘 鐘 鐘  
 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花  
 舟 雨

標紙

了らば人の明れと見えれば花標  
川舟の舟こく静の水に下り  
此の川の水はわくまきく早苗の柳  
山てしりし水は心行して葉標

葉舟  
指山  
舟紅  
梅舟

初春の波陽りし風は又傍の杜と  
此の春は不易に愛信とある梅舟と  
扇らし常の英娘の許しよるに凡  
為の常にはまゝ家の説は合せてまゝの

一字に娘舟をあらはす梅の詞を下り  
しりし前代の佳樹百常と寂も細心  
時をくしるは娘舟の産後しるん

梅

芽出たはぬのふ入屋りくたし

懈りしときもりしれ梅舟の

葉舟

志はしりし古の心は梅舟

梅舟

色も申りし北舟舟の心は

舟舟

縁しりし月とさす舟は舟舟

露はしりし心は舟舟の心

舟てまじし梅舟の心は

現少田二をそとふ色一北米  
度今の郡一とに谷の何れと  
茶畑茶畑の仕立り  
口より暖くは深く熱れを  
其に抱ゆる熱く北米

大徳徳行一

一日休居し酒身しを加り上銀り  
お氏床北一襦りそやしく良興

息と一其芳茶の若なり

柳奇

茶 福色くそれさるるを 常多  
行 寺と餅しはけいさるる竜引 若柳  
都 一すれ北谷代新茶 坊  
家北端に若れ札取し揚り市 舟多  
神酒しそふく一 舟多  
豊 一とそふく一 舟多  
其枝し若し一 舟多

大八分表

色紙

六月雨や来りたり梅の影も来り

舟西

六月雨や来りたり梅の影も来り

石籠

梅の影も来りたり六月雨

梅山

梅の影も来りたり六月雨

芥柳

六月雨や来りたり梅の影も来り

紫白

六月雨や来りたり梅の影も来り

坊

六月雨や来りたり梅の影も来り

吾流

六月雨や来りたり梅の影も来り

机

垢

梅奇

琴帳箱垢山主物と我小多身年北切女  
かしの影も来りたり梅の影も来り  
や風を以て坊の事極小吹種やこれ此の  
今此概年と念ふこと三年は思ひ  
呼ばれやと云ふこと梅奇紫白の二子  
か後身補作と云ふこと遠の式目洞と云ふ  
そ身の影も来りたり梅の影も来り  
の天照若狭の南冥社年と云ふこと  
らんやうと云ふこと百例と云ふこと  
百天子所と云ふこと紫白と云ふこと  
そ身帯と云ふこと紫白と云ふこと  
父と云ふこと紫白と云ふこと  
速と云ふこと紫白と云ふこと

海より長之の妻川へくまに渡され  
沙はよきなむ

坊

心離るるく 渡り人 其北 紅之 島本

指山

梅舟の窓より 恩北 夕 風

指山

境に心は 何処にも 渡り人 其北 紅之 島本

梅舟

子供少くも 年敵人 其北 紅之 島本

左記

ちよひし 二子 舟の 紅之 島本

梅舟

一里 小舟 舟の 紅之 島本

梅舟

渡り人 舟の 紅之 島本

梅舟

渡り人 舟の 紅之 島本

梅舟

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟

舟舟 舟の 紅之 島本

渡り人 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本

舟舟 舟の 紅之 島本



留聲人の山はももる後此月  
苞の熟り柿の店へ思ふ  
城下と牛馬の争ふをぬけ  
何し何し何し何し何し何し  
あつと明け年の花あつ法  
花つ法つハハハハハハ

石鏡歌行

標記

多秋や二五葉の山も藤り一  
折尔ゆる尾もよもよもや花  
もそよ乃物抄つりもや青  
紙しそ田唄の声や夕日  
石牛や小娘連りそか  
初経や五叶の枝をく  
石首や之りやも川流れ  
津渡の物見坊一

繪談

舟多  
折奇  
堂内  
辰一  
指山  
新板  
古籠  
坊

千竿蓮  
月子後假  
山里子家  
松子所  
松子舞  
宅經  
波に影

肖れをてん蓮竹相向り  
今やうい流り月と志み  
こめ系もさるく思て秋の香  
松影や那もけあふそ十か  
ふ年うんしとらんくふ  
中るすも月柄探む。挑乃流  
りくしとるくもさるく長北海

枹奇  
堂  
枹山  
枹  
在祀  
一  
舟雨

娑悟祝言枹山史報の湯をく陰陽  
城重北枹山史報の湯をく陰陽

江に社交し密子母を故のく

此ハハのむと新めま御目子と

枹奇

くくたふく後も早とちく

枹山

ふと

披しふは流しも嘆く人五月山

枹

臨在追をふくくに及せ

長一

板茶院をふくはは日しの茶候

壽名



賊内是向 鯨く北年

古後親行

櫻山

櫻山の室や 主向水は流さぬ  
 櫻山の実や 春に花は紅く  
 川舟や 元舟小舟く 煙草を  
 夏舟や 籠せ 旗舟く 山を  
 日舟の 八舟も 北年 夏舟

櫻山は 主向水は流さぬ  
 櫻山の実や 春に花は紅く  
 川舟や 元舟小舟く 煙草を  
 夏舟や 籠せ 旗舟く 山を  
 日舟の 八舟も 北年 夏舟

ふと

何事か 主人 負使ぬ 舟く 北年  
 一同 舟舟も 打ち 舟く 北年  
 痛くも 舟舟も 舟く 北年  
 舟舟も 舟舟も 舟く 北年

ほくくまの音らしむに月 常多  
丁しのねもやなみ下 詠水  
あふみの心もなごむ 吾任  
中月小刻れり 長一  
を金おしめけり 指山  
息にふ旅の音も 指山  
それこそ 指山  
社日たふらん 指山  
右 指山

くまの音らしむに月 常多  
丁しのねもやなみ下 詠水  
あふみの心もなごむ 吾任  
中月小刻れり 長一  
を金おしめけり 指山  
息にふ旅の音も 指山  
それこそ 指山  
社日たふらん 指山

卯の毛の音らしむに月 常多  
新しき音もやなみ下 詠水  
為所

長一英相の音らしむに月 常多  
あふみの心もなごむ 吾任  
中月小刻れり 長一  
を金おしめけり 指山  
息にふ旅の音も 指山  
それこそ 指山  
社日たふらん 指山

昔今より傳居也 極其難事と信じて  
しつじつと飲みしく 支何とれこの  
一樹よをそとく 彼奥より 信じて

梅三十一

奥と樂し 禱り 嘆ても 柳の葉を

涼しと 涼しく 又と 夢を 一 庭 一 丘 一

ふと 照 追悼

西へ 飛 一 去 一 也 日 一 一 一

15

今と 惜し 心 一 又 月 一 一 一 一 梅 奇

小 別 一 一 一 一 一 一 一 一 一

常 一

廿 一 一 一 一 一 一 一 一 一

辰 龍

涙 文 一 一 一 一 一 一 一 一 一

舟 雨

舟 一 一 一 一 一 一 一 一 一

辰 一

知 一 一 一 一 一 一 一 一 一

指 山

東 一 一 一 一 一 一 一 一 一

吾 一

大 八 句 表

櫻 花 香 詠 不 去 照

吹傳く来くや散る名とを所し  
富なくく灯と雪も如く  
阿しと又西も北路も梅多北音  
定かたは世と又くし教もあふん  
おしとくしつるれはるるる 鐘  
舟五

初冬に陽和室に北地席を何れもして

二

眠くしとくし又かや牡丹畑

標とくしとくし又かや公長

梅奇

高川の原舟月夜此の時代は枝と  
奥山下りもあつたし清湯り  
あつたしとくし例し馬橋を  
あつたしとくし感行を  
りつたしとくしあつたしとくし  
あつたしとくしあつたしとくし  
あつたしとくしあつたしとくし  
あつたしとくしあつたしとくし  
あつたしとくしあつたしとくし

梅奇

編りし枝も休くれ梅多北路

日記と傳ふる人涼し

解房

細いのもさへもねれ自然うへ  
指山

浅い海にれ終へてうへはく

夕月も望経のなま子こゝろし

をさすをーれこふはと何てハ

まよてし酒登名め浮せをー

細子まのふを四海波風

件くし縁の上まに二交れ縁

白髪交れね髪めさるる嬬遊

ふりかたしう小きれハ下へ板板ふ

土箱ねくままあふせぬ影寫

江色も橋の虫とむく津門を

ふん丸時をささるるを撰化

古用しと縁ゆく今う片日記

通ひも送るれ糸のふ撰姫

流と平下ん局流のゆかきま

彼のみさくちまのままに玉丸

月更し小暗くは枝の退てし

さるるゆくりー花のまの

尾北身ハ尾北身うりるれ在の縁

海ふゆめも及海のまもる



年切れん糸の端の木立落し  
紫じ様子も今や花時

右短歌行

各詠送別あふし略

新母一老の虫魚の詠 柳  
折る花一ふれ涙の着る衣  
あふる花のうらみ 花より  
深き水は流るる 道は花より  
紫句  
舟多  
詠水  
其詠

後重やアア人及とアア  
右花  
花柳  
反律  
長一

そよ風は吹く  
花  
柳  
長一

此は江戸の柳柳子と云ふた月日名を詠ふ  
定くしつ日ハ夏の市中に今も柳を詠ふ  
日ハる院 宗平に子やうとて花柳は日  
一女人子ハ目とて月とて花柳は日  
己やうとて柳中月とて花柳は日  
一とて花柳は日とて花柳は日  
一とて花柳は日とて花柳は日

りよの月夜とて花柳  
合欵の花柳  
指山

苗列

松風冥社互此信しゆかれ今年も凡  
方々に傳ふる清林に於ては交信年  
此もて此一々信記之れ年記小委  
り此の政史をくはつる中にも陽和と  
此等信しゆたまた一紙の連與此格好  
分りて此一人和の指當れあり此洪家  
怒り此れは存る日也起るに心むなく  
何れも傳記のやとすはく此も  
古軍に於て此下飛書ふまはしつる  
おと危る期子及人々老れ末練し能  
一一物教いして教とてきたに

世靜房

信しゆたまた一紙の連與此格好

丑、二月十日凡座傍、又和し

列毒や瘴の常山常一那下  
舟の聲も此も此も此も此も  
茶花もやあつし包はさきまの瘴



舟をりくや波かきしりし月  
を帆に別れくあしりし月

大文化のそとに月が写る

陽和堂

梅奇

